

いま にひやくねんほどまえ
今から二百年程前のことです。二女子村のそばに佐屋街道がと
おっていました。この街道のほとりにある寺に、可愛い娘が生ま
れました。名をおむめといって、幸福な日がつづきました。しか
し、おむめの七才のとき、父は、諸国に修行しにでかけなければ
なりません。父はうしろがみをひかれる思いでしたが、い
たしかたないと悟りました。父はおむめに、笹笛のつくり方を教え、
「淋しくなったら、この笛をふきな、ととさんもどこかで吹いて
いるから」と、いって、先ず西国へ旅立ちしていきました。

それから、いくつかの歳がたちました。おむめは雨の日も、風の
日も街道に立って、僧の姿をみては、もしや、ととさんではない
かと、かけよりましたが、どの人もちがっていました。西の養老
山脈に、真赤な夕焼けがかかりますが、今日もだめでした。おむ
めは笹笛をつくり、吹きました。

ととさん こいしや 西の空 いまごろ どこで どうしやる
花の香りも いろあせて

それから又、歳がかりました。他国の空の下では、やつれた父
は、おむめの年頃の娘をみてはこいしさがたかまりました。

おむめ こいしや 旅の空 いまごろ里で なにしやる
さびしささそう 笛の音

いつしか、まどろんだ夢のなかに、妻や娘の姿がうかんで、
なにかをいいたそうにしています。はっと目をさました父は、ふ
るさとめざしてとんでかえりました。

やっとついたのは秋の初め、日もとつぷり暮れた夜でした。な
つかしい寺はさびれ果てて暗い本堂にろうそくの火が風にゆられ
ているばかりです。あとでわかったことですが、母娘はやはり病
で、父の帰りを待ちながら世を去りました。悲しみにくれた父は、
何処へともなく去っていったそうです。

【解説】「二女子村と佐屋街道について」……

二女子（によし）村は珍しい地名ですが、昔の領主の娘たちに由来するという説が
あります。今では残っていませんが、かつては一女子（いちによし）から七女子（しち
によし）まで7つの村があったようです。古い昔この付近に7人の娘を持つ領主がおり、
娘が嫁に行く際にそれぞれに土地をつけたそうです。これがもとになり7つの村が誕生
したと言われます。一説には、かつて海に面した土地を開拓して新田を開発した際、一
つの潮（うしお）から、七（しち）の潮と順に呼んだそうです。後にこれらが訛り、一
女子から七女子までの村名になったと言います。

佐屋街道は熱田区に位置する東海道の宮（みや）宿から、中村区の岩塚（いわづか）
宿、中川区の万場（まんば）宿、津島市の神守（かもり）宿を経て、愛西市の佐屋宿を
結んでいました。佐屋宿から東海道桑名宿までは船が通っていました。海の荒天に左右
されにくく東海道の脇街道として重要な役割を担っていました。

【テキスト】『むかしばなし中川区風土記』山田寂雀／編集（中川区制施行50周年記念事業実
行委員会）「悲しい笹笛」を一部省略したものです。

【参考資料】『日本歴史地名大系 第23巻（愛知県）』平凡社